

Book Review 16-2 人物 牧野富太郎

朝井まかて氏の『ボタニカ』を読んでみた。1959年、大阪府生まれで様々な文学賞を受賞している。ボタニカとは、植物学を意味するイタリア語。

明治初期の土佐・佐川の山中に、草花に話しかける少年（牧野富太郎）
近々、NHKの朝ドラとして登場するようだ。

小学校中退ながらも独学で植物研究に没頭する。こんなに植物が好きな人がいるとは驚きである。「日本人の手で、日本の植物相（フロラ）を明らかにする」ことを志して上京。幼馴染の妻に手を出さず、東京で愛人と同棲（後に結婚）。東京大学理学部植物学教室に出入りを許されて、新種の発見、研究雑誌の刊行など目覚ましい成果を上げる。しかし、よくある話で教授の嫉妬で突如として大学を出入り禁止になる。私財を惜しみなく注ぎ込んで研究を継続するが、気がつけば莫大な借金に身動きが取れなくなっていた。

貧苦にめげず、恋女房を支えに、不屈の魂で知の種（ボタニカ）を究め続けた稀代の植物学者を描いている。

我が家では、庭の植物が妻の話し相手、慰めとなっている。植物の力は偉大なり。